
仮面ライダーアロマ

闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーアロマ

【Nコード】

N4820W

【作者名】

闇

【あらすじ】

大都市「グローバルシティ」そこは医療技術が発達した世界。人々を怪物「インファクト」に変貌させる麻薬「インフレリア」から人々を守るため、戦士^{ライダー}が現れる！！
人類救済システム・起動！！

CHART:00【ハジマリ】

瓦礫の積もる焼け野原。

そこで、ボロボロの白衣を身に纏った青年が、右足を引き摺るように歩いていった。

彼の右腕は肩から無くなっており、血液がドボドボと無制限に流れ出している。

青年は涙を浮かべながら、辺りを見渡す。

「……なんで、こんな事になってしまったんでしょうか……」

青年の声は、どこか震えている。

「これが、永遠を願った者達への仕打ちなのですか……」

すると、

ズキッ！

「うっ！」

突如痛みだした右肩を、青年はおさえる。

「なんで…僕だけ…僕だけが生き残ってしまったんだ……」

二十年前、三月五日。

とある研究施設は、謎の爆発により吹き飛んだらしい。

一人残された青年は、ただ、突き付けられた現実に絶望するしかなかった。

現在の借金ポイント

【0】

CHART:00【ハジマリ】(後書き)

次回、

CHART:01【緑の戦士】

CHART:01【緑の戦士】(前書き)

息抜き小説です

CHART：01【緑の戦士】

・二十年後・三月五日

・メディカルカンパニー・社長室・

「社長」

眼鏡をかけた白衣の研究員が、社長室の席に腰かけている男に声をかけた。

「どづした？」

「ミストルが、インファクトの製造実験に成功したようです」

「そうか……。ついに、この時が来たのか……」

社長と呼ばれた男は、手元のコンピューターのディスプレイを見つめる。

そのディスプレイには、とあるシステムの設計データが映っていた。

「人類救済システム第一号……“アロマ”を起動させる時が……ついに……」

「しかし社長。まだアロマの起動実験は……」

「その心配はない。システムは既に、適任者の元に渡った」

「なっ?!」

研究員は男の言葉に顔を歪める。

「なんて勝手な事を!!」

「何か不満か？」

「あれはまだ開発したばかりで、まだ一度もテストしてないんですよ?!」

「ああ、分かってる。だが、彼ならきつと使いこなせるさ」

「……彼？」

男の言葉に、研究員は首を傾げる。

「ああ……。彼ならきつと……」

男は確信を持った声音で、そう頷いた。

・霧崎医院・

「霧崎先生、今日もありがとうございます」

「いえいえ。またどこが悪くなったら遠慮なく来てくださいね」

白衣を身に纏い、右手に手袋を着用した青年は、玄関先で中年の男性を見送ると、医院の中に入った。

「……………ん？」

青年は、医院の玄関の端に置かれていたアタッシュケースを手にする。

「これは一体……………」

アタッシュケースには、こう書かれていた。

A R O M A S Y S T E M

「アロマ…システム？」

青年が暫く黙っていると、

「ここが霧崎医院かあ……………」

一人の少女の声が聞こえてきた。
青年は声のした方向を見た。

「あの…貴女は？」

「あたし？あたしの名前は『前田 エミナ』」

「前田…?」

青年は、その名字をどこか懐かしむような目でエミナを見る。

「君…、ひょっとして『前田 リリナ』の妹さん？」

「そうだけど。…姉さんを知ってるの?」

「まあね。君のお姉さんとは、元同僚だね」

青年の表情が、少し暗くなった。

「へえ」

少女は関心していると、「あっ!」と声をあげて手持ちのバッグを
探る。

そして、一枚の紙を取り出した。

「ここに霧崎相馬っていう四十過ぎの人居る?」

「ええ?...まあ、居るけど.....」

「じゃあ、その人の所に案内して」

「なんで?」

「この落とし前を着けてもらうためよ!...」

エミナは紙を青年の前に突き出す。

「じゃ、借書？」

「そう！霧崎相馬って奴が姉さんに押し付けた借金のせいで、私がどれほど苦労した事か……」

「ええ?!」

青年は目を剥く。

「そんな……借金をした覚えは……」

青年はあまりのショックに、ブツブツ小言を呟く。

「で。さっさと霧崎相馬の所に案内してよ!」

「ちょ、ちょっと待って。少し頭の中を整理させて……」

青年が頭を唸らせていると、

ピルルッ!

突如、青年の携帯電話が鳴った。

「あつ、ちょっと待って」

青年は携帯電話の通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」

あ、霧崎か？

「はい、そうですけど……もしかしてカンジさんですか？」

ああ、そうだ

「一体どうしたんですか？」

実はな、この町の裏路地で遺体が見つかったな。検証解剖の結果、過去に類を見ない謎の薬物反応が出たんだ。そこで、我々警察としては君の意見が聞きたいんだ

「過去に類を見ない謎の薬物反応……。カンジさん、まだ遺体は残ってますか？」

ああ、一応な

「分かりました、今すぐ行きます」

助かる。本当にありがとう

「では、また後ほど」

ああ

カンジという刑事からの電話が切れ、青年は身支度を整えるために医院の中に入る。

「ちょ、ちょっと!」

エミナは青年の肩を掴む。

「どこに行くのよ!」

「科捜研です」

「科捜研?」

「はい。ではそういう事で」

青年は道具をバッグに詰めると、バッグを握り締め、科捜研に向かおうとする。

「ちょっと!私はどうすればいいのよ?!」

「医院の中で、適当にくつろいで下さい。午前中の診療は終わったんで」

青年はそう言うと、霧崎医院を去った。

「全く、なんなのよ……」

エミナは文句を垂れながら、霧崎医院の中を見渡す。

すると、一つの写真が目に入った。

「あっ……これ、姉さんの写真だ」

エミナが見つけたのは、姉であるリリナと若い男性のツーショット写真だった。

「……………あれ？」

エミナは写真を見ていて首を傾げる。

「この男の人、さっきの人にそっくり……………」

リリナの隣で笑顔を浮かべている男性は、先程の青年にそっくりだった。

写真の脇には撮影日なのか、【1991/3/4】と書かれていた。

「そんなわけないよね。この写真、二十年前に撮られたみたいだし……………。きつと、息子さんだよ……………」

エミナはそう呟くと、玄関の脇に置かれていたアタッシュケースに目を向けた。

「何これ？」

エミナはアタッシュケースを両手で持ち上げ、色々な角度からアタッシュケースを見る。

「ひょっとして、さっきの人の商売道具かな？」

エミナは「仕方ないなあ」と言って、アタッシュケースを片手で持つ。

「届けてやるかあ」

明らかに何様なのかという態度で、エミナは科捜研に向かった。

・ミストル・アジト・

「お、おい…ここどこなんだよう……」

手術台に拘束されたサラリーマン風の男は、怯えた声をあげながら、辺りをキョロキョロ見る。

「おーい、誰かあゝ！誰か助けてくれえ！！」

男は必死に助けを求める。

すると、部屋の扉が開き、白衣と白マスクを着用した人物が入ってきた。

「な、なんだあんたは！！」

「光栄に思うがいい」

声からすると男性だろうか、白マスクの男は、注射器を取り出す。

「なんだ…それは……」

謎の溶液が入った注射器。

サラリーマン風の男の恐怖心はどんどん膨らんでいく。

「今から貴様は、神の礎となるのだ」

白マスクの男はそう言つと、注射器の先端をサラリーマン風の男に向ける。

「やめる…やめてくれ！」

サラリーマン風の男は許しを乞うかのように、ただただ震える声を出す。

「心配することはない」

白マスクの男は優しい声音で、注射器をサラリーマン風の男に刺し、トリガー部分を一気に押し込み、謎の溶液を体内に送り込む。

「うああああああ！！！」

サラリーマン風の男は途端に目を血走らせ、獣の如く咆哮した。

筋肉が膨れ上がり、サラリーマン風の男のスーツが破ける。

「ウウ…グウウウウ！！！」

顔は歪み、原型が留まっていないほど、異様で醜悪なモンスターとなった。

・科捜研・

「これは……」

白衣を身に纏い、右手に手袋を着用した青年は、顕微鏡を覗き込んだ後、少し顔を青くする。

「インフェリア……なぜ、この薬が……」

「霧崎さん！」

すると、科捜研の研究員が青年を呼んだ。

「なんですか？」

「あの、霧崎さんにお客様が来てるんですけど……」

「お客様……ですか？」

青年は訝しげると、身だしなみを整えて自身の客のもとに向かう。

「あ、いたいた」

待合室で待っていたのは、エミナだった。

「エミナさん、どっしてここへ？」

「これ。忘れ物でしょ？」

エミナは青年にアタツシユケースを渡す。

「どっも……」

青年はアタツシユケースを受け取った。

すると、

「きゃあああああ！！」

「「ッ?!」」

突如、外から悲鳴が聞こえた。

青年とエミナは直ぐ様外に出た。

「なに…?…あれ……」

エミナの声が震える。

「グワアアアアア！！」

外で暴れていたのは、異形の化け物だった。

「インファクト……」

青年はアタツシユケースを握る手を強める。

「インファクト？」

エミナは青年が口にした言葉に首を傾げる。

「インファクトは…ただの化け物です……」

青年は顔を俯かせ、ふとアタツシユケースに目を向ける。

「アロマシステム……まさかこれは……」

青年はアタツシユケースを開ける。

ケースの中には、バックル『アロマドライバー』と注射器の形を模したアイテム『アロマチューナー』と、エネルギーが貯蓄された『リーフエナジーポット』が入っていた。

「これがアロマシステム……」

青年はケースに入っていたマニュアル本を開き、大体のシステム構造をチエックする。

「これなら……」

青年はケースからアロマドライバーを取り出し、腹部に装着する。そしてアロマチューナーを開放させ、リーフエナジーポットをアロマチューナーにセットする。

「変身……」

アロマチューナーをアロマドライバーにセットし、バックルの左レバーを押し込む。

《リーフエナジー》

《チューニング・レポリューション!!》

次の瞬間、青年は緑の鎧に包まれ、緑の瞳の戦士『仮面ライダーアロマ』に変身した。

「か、変わった!?!」

エミナはアロマの姿に驚愕の声をあげる。

「これが…アロマ……」

アロマは両手を握り締めると、怪物『インファクト』に突っ込む。

「はああああ!?!」

「?!」

アロマはインファクトを蹴り飛ばす。

《ダメージポイント・24》

バックルから電子音が響いた。

「ダメージポイント?」

アロマはインファクトを見つめる。

「現在の合計HP…76。……なるほど」

アロマの複眼『アロマアイ』がインファクトのHPを割り出し、それが脳内に流れてくる。

アロマは自身のシステムを再確認すると、インファクトを殴り付ける。

《ダメージポイント・06》

「なるほど。この形態は、パンチよりもキックの方が効果的みたいですね」

アロマはキックでインファクトを攻撃しまくる。

「はあああああー!!」

「グフア?!」

《ダメージポイント・30》

インファクトは後方へ吹っ飛び、苦悶の声をあげる。

「残りHPはジャスト40。これなら……」

アロマは、アロマチューナーのトリガーを押し込む。

《ファースト・チャージ》

リーフエナジーポット内のエネルギーが、バツクルから右足に集中する。

アロマはインファクトを指差す。

「治療の時間です……」

右足に蓄積されたエネルギーが満タンになり、アロマは空中へジャンプする。

アロマはバツクルのレバーを押し込む。

《ファイナリング・チャージ!!》

「はあああああ!!」

右足のエネルギーが解放され、必殺技『リーフエナジーキック』がインファクトを貫く。

「グアアアアア!!」

インファクトは爆発し、その場に倒れた。

「ウゲツ?!」

インファクトの筋肉が見る見る内に収縮し、裸であるサラリーマン風の男性となった。

「ふう……。治療完了ですね」

アロマはアロマチューナーをバツクルから抜き、変身を解いた。

「よいしょ……っ」と

青年はサラリーマン風の男を担ぐ。

「な、なにしてるの？」

赤面しているエミナは、青年に尋ねた。

「なにつて、裸の男性を道に転がしておくわけにはいかないでしょ？」

そう、サラリーマン風の男は、裸なのだ。
全裸なのだ。

青年はサラリーマン風の男を担ぎ、霧崎医院に向かう。

「僕の医院で治療するんです」

・メデイカルカンパニー・

「ついに起動したか……。アロマシステム……」

メディカルカンパニーの社長は、社長室から広がる空を見渡し、呟いた。

「この分ならば、これの起動もすぐ間近だろうな」

社長は、手元のアタッシュケースを愛しげに触れる。

「人類救済システム第二号：“セラピシステム”。コードネーム『セラピス』」

・霧崎医院・

青年はサラリーマン風の男を寝台に乗せ、一息吐いていた。

「ねえ」

エミナが青年に声をかける。

「なんですか？」

「霧崎相馬は？ここに居ないみたいだけど」

「居ますよ」

「どうして？」

「……」

エミナは辺りをキョロキョロ見渡す。

「居ないじゃん」

「よく目をこらして見て下さい」

「うん……」

「霧崎相馬は、貴女のすぐ……目の前に居るじゃないですか」

「目の前？」

エミナは目を細めて青年を見つめる。

「……………」

「僕が、霧崎相馬です」

「因みに年齢は？」

「今年で四十六です」

「ええええええ?!」

エミナが驚くのも無理はない。

霧崎相馬と名乗る男は、どう見ても、二十後半にしか見えない好青年だからだ。

相馬は何気なく、借用書に目を向ける。

「えっ…?!」

相馬は借用書に書かれていた数字に、思わず目を剥いた。

「や…三億?!」

相馬は、卒倒しそうな思いになった。

現在の借金ポイント

【300,000,000】

CHART:01【緑の戦士】(後書き)

次回、

CHART:02【炎の剣】

CHART:02【炎の剣】(前書き)

テスト勉強の息抜きでチヨクチヨク書いていたら、気付いたら12000文字……びっくりしました。

なので、今回はかなり長いです。

ぶっちゃけ、二話分の文章量に相当します。

では、ごっご

CHART:02【炎の剣】

・霧崎医院・

「お断りです！」

相馬はエミナに向かって叫んでいた。

「なんでよ?!元はと言えばあなたの借金でしょうが!！」

「だから身に覚えがないと、何度も言ってるでしょうが!！」

相馬とエミナは、互いに一步も引かない睨み合いを続ける。

「あなたには私の保護と借金の支払いをする義務がある!！」

「ありません!！」

・ミストル・アジト・

「まさか、人類救済システムが既に実用段階に移行していたとは、予想外ね」

薄暗い部屋の中、女性の声が響く。

「どうやらメディカルカンパニーは、我々の動向を把握しているようですよ」

女性の言葉に答えるように、秘書の男が話す。

「どこかしらから、情報が漏れたとでも言うの？」

「分かりません」

「今すぐ、調べなさい。裏切り者の所在を」

「承りました」

秘書の男は頭を深々と下げ、部屋を後にした。

「インフェリアによって、世界は変わる。そのためには、人類救済システムはいらぬ」

・霧崎医院・

「あんたが頷くまで、私ここから動かないから!!」

エミナは医院のソファに腰掛け、横になる。

「営業妨害で訴えますよ!!」

「だったらこっちは詐欺罪で訴えてやる!!」

「借金なんてしてませんし、誰かに押し付けるような真似なんかしてません!!」

「口ではいくらでも言えるわね!!」

「事実ですから!!」

「嘘つき!!」

二人は「ぜえ…ぜえ……」と、息絶え絶えになっている。

ピルルル!

すると、相馬の携帯電話が鳴った。

「はい、もしもし」

相馬、俺だ

「カンジさん、どうしたんですか?」

昨日、お前がウチに届けた男から、例の薬についての情報が聞き出せた

「本当ですか?」

因みに昨日の男とは、インファクトとなったサラリーマン風の男の事である。

意識を取り戻した彼はあの後、相馬によって警察に連行されたのだ。

ああ、詳しい話はこっちで話すから、ちょっと来てくれないか？

「分かりました。すぐ行きます」

相馬は電話を切り、警察署に向かう準備をする。

「ちょっと、逃げる気？」

「これから警察署に行くんです」

「自首する気になったの？」

「違います」

相馬は身支度を整え、エミナの言葉を受け流し、玄関に向かう。

エミナは相馬の後をついていく。

相馬はエミナに言う。

「三十分くらいで戻ります。その間、留守番頼みます。話ならその後で聞くので」

相馬はエミナに必要最低限の事を伝えると、警察署に向かった。

「……ん？」

エミナは視界の隅に映ったアタツシユケースに目を向ける。

「これって、昨日の……」

エミナはアタツシユケースを軽く小突く。

「もしかしてこれって……売ったら凄い値打ちモンだったりして……」

エミナは顔を『ニヤリ』と微笑む。

・警察署・

「赤服の女…ですか？」

「ああ。男の話によれば、道を歩いていたら、突然赤服の女に声をかけられて、こう言われたらしい」

“希望が欲しくないですか？”

「ってな」

「希望……」

相馬は、刑事である中年の男『カンジ』に話を聞いていた。

「カンジさん、昨日の男性はどちらに？」

「ああ。あの人ならさつき家に帰ったぞ」

「住所を聞いてもいいですか？」

「霧崎」

カンジは相馬をたしなめるかのように言う。

「もっと、俺達警察を信じてくれ。この件については、俺達が必ず解決してみせる。だから、教えてくれないか？この町で、今何が起きているのか……」

「……………」

カンジの言葉に、相馬は押し黙ってしまふ。
カンジは、確認を取るような言い方をする。

「もしかして……“例”の件が絡んでるのか？」

「……………！！」

相馬の表情に、カンジは確信を持つ。

「なあ、相馬。お前が右腕を失ったあの日、一体何があったんだ？」

「……………」

相馬は右腕を力強く握り締める。

「相馬、頼むよ。俺を信じてくれ」

「それは……無理かもしれませんが」

相馬が発した言葉に、カンジは悲しそうな表情を浮かべる。

「相馬……」

「あの日の事は、絶対に話せません。絶対に……」

・二十年前・

・とある研究所・

二十年前、とある孤島に浮かぶ研究所で、霧崎相馬は働いていた。

「相馬、試験体143なんだが……」

「どうしたんですか？」

職場仲間の研究員に話しかけられた相馬は、仕事の手を止める。

「ここんところ、見てくれないか？」

差し出されたレントゲン写真を受け取り、相馬は、研究員が指差す先を見つめ、眉間に皺を寄せる。

レントゲン写真に映されている人間の心臓部分、その下に、謎の発光体がしっかりと映っていた。

「これは…ひよっとして……」

「ああ。ついに、完成したんだ」

相馬の反応に頷いた研究員は、声を震わす。

「俺達の研究が、ついに実を結んだんだな……あはは」

研究員は思わず笑みを溢す。

研究員の様子に、相馬は確認を取るように言う。

「それじゃあ、これはやはり……？」

「ああ。永遠の命を持つ究極の生命体……ホムンクルスだ」

場面は移り、辺りは瓦礫と炎に囲まれた焼け野原となった。

「あ…ああ……」

相馬は、仲間達が瓦礫に押し潰され、炎に吞まれていく様を、ただうち震えながら見つめるしかなかった。

「グアアアア!」

「っ?!」

次の瞬間、相馬の右腕は何者かに食いちぎられた。

「あああああ!」

……

「っ……!」

相馬は思わず、右腕を握り締める。

「カンジさん」

回想をした相馬は、カンジに忠告するかのようにつ。

「もう…この件には関わらない方がいいですよ」

それだけ言うと、相馬はカンジの前から去ろうとする。

「相馬!」

カンジは相馬を引き留める。

「何がお前をそうさせるんだ？なぜ、この件に関わるつもりか！？」

「それが…僕が犯した大罪だからです」

「大罪？」

「……………。終わりなき人生に、意味なんてないでしょ？」

相馬は一步、前に進む。

「はあ……………」

カンジは溜め息を漏らし、懐から紙を取り出し、相馬に投げつける。

「痛っ?!」

相馬はカンジに投げつけられた紙を手取る。

そこには、サラリーマン風の男の住所と電話番号が記されていた。

「カンジさん…これ……………」

「お前の好きにすればいいさ」

「……………ありがとうございます」

相馬はカンジを一礼すると、警察署を後にした。

「あゝあ。カンジ、あんな事してよかったの？」

物陰から現れた金髪の女が、カンジに声をかける。

「ユキ……」

カンジは金髪の女『ユキ』に対して呆れを含んだ声を出す。

「お前、こんな所で油を売ってる場合か？」

「こつちの事件なら、既に解決済みよ」

「流石だな」

ユキは「それより……」と続ける。

「一般人を巻き込んで、一体どうするつもり？ただでさえ、こつちの部署じゃ後ろ指を差されてる立場でしょーが、アンタ」

嘲笑を浮かべるユキは、「そろそろ辞令が下るんじゃない？」と言
う。

「その時はその時だ。最終的に霧崎を巻き込んだのは、俺のミスだ」

「ええ…でもまあ、結果オーライなんじゃない？」

「どづいつ事だ？」

「聞いてないの？上からの指令で、アンタが担当している事件は打ち切りだつてよ」

「な…なんだと?!それはどういう事だ!!」

「まあまあ、落ち着きなさいって。確かにアンタは一般人を、担当している事件に巻き込んだ。でも、その事件の捜査事態が無くなっただから、アンタの首は繋がったのよ。もっと喜びなさいよ」

「喜べるか!人間を化け物に豹変させる薬だぞ……。誰が造った?誰が売った?まだ何一つ事件は解決していない!!なのに、何故打ち切る?!」

「さあね。上の考えてる事なんて知るわけないでしょ」

「くっ!」

カンジは悔しさに、顔を歪める。

「ねえ、カンジ」

「なんだ?」

「アンタ……私と闇捜査しない?」

「……………え?」

ユキの提案に、カンジは目を見開く。

「実は私も、今回の上からの指示には納得いってないの。近々闇捜査しようと思ってるんだ」

闇捜査……上からの許可を得ずに独断で捜査する事。
バレた場合、クビは確実だ。

「でもまあ、私一人だけだと心許無いからね」

「俺に…共犯者になれと言っのか？」

「別に…？それを決めるのは……カンジ、アンタよ。まあ私としては、共犯者というより相棒的なものかしらね？」

「……………」

カンジは暫く考える。

正直、この女とバディを組むのは不安だ。

常時ふざけている印象と異なり、この女は自分と違って、数々の難事件を解決してきた刑事捜査課の期待のルーキーだ。

この女が俺と組むのは、きっと保身のためだろう……闇捜査がバレた時の。

闇捜査がバレた時、きっとコイツは、俺に捜査を強要されたとしても言うのだろう。

上の方としても期待のルーキーを失うのは大きな痛手だ。

きっと、俺だけがクビになる。

なるほど、良く出来たゲームだ。

勝っても負けても、コイツは一切損しない。

損するのは、むしろ俺の方だ。

勝ってもコイツの出世の踏み台、負けてもコイツの尻拭い。

だが、面白い。

たとえ、利用されるだけだったとしても……俺はこの事件の真相が

知りたい。
コイツと組めば、きっと真相に近づける。
なんとなく、そんな気がした

「分かった。俺は、お前の共犯になってやる」
「やったあ」

この時のユキの顔は、まるで百人力の味方を得たかのような、晴々とした笑顔だった。

・とある質屋・

「これ…ですか？」

「そう、これ」

エミナは眼鏡を掛けた若い質屋の店主にアタッシュケースを渡す。

「中を拝見しても？」

「どーぞどーぞ。なるべく高く買ってね」

店主はアタッシュケースを開ける。

「……あっ……」

店主はアロマドライバーを見つめ、口を開けて呆然とした。

「これって……」

「あああああー!」

エミナは店主に詰め寄る。

「お・い・く・ら・で・す・か?」

「いくらと言われましても……これ……」

店主は悩むように唸る。

「これ凄いのよ、変身して化け物を倒しちゃえるんだから!」

エミナは店主に、アロマドライバーの利点を伝える。

「うーん……。あ、そうだ」

店主は奥の倉庫に行き、ある物を探す。

「あつた」

目的の物を発見すると、カウンターに戻ってきた。

「これと交換でどうでしょうか?」

店主が持ってきたのは赤いエネルギーポット“フレアエネルギーポット

” だった。

「……お金じゃないの？」

「はい。値段が付けられないので」

「でも、これ……」

エミナはフレアエナジーポットとアロマドライバーを見比べる。

「明らか私が損してない？」

「気にしない方向で」

エミナは「え〜〜！」と不満の声を出すと、店主はアタッシュケースをエミナに押し返す。

「ご不満なら、他を当たって下さい。……まあ、当店以外にこの町に質屋はございませんが」

「ぐぬぬ……」

エミナは店主に足元を見られ、悔しさのあまり勢いに乗ってしまつた。

「分かったわよ、それと交換……!」

明らか損しているというのに。

「毎度ありがとうございます」

店主は営業スマイルを浮かべ、フレアエナジーポットとアロマドライバーの入ったアタッシュケースを交換した。

・マンション・1407号室・

ピンポーン

インターホンが鳴り響く。

「はい…?」

マンションの扉を開けたのは、サラリーマン風の男だった。

「安藤桐雄さんですよね?」

「ああ…あの時のお医者さんですか……」

サラリーマン風の男……安藤桐雄は、目の下にクマを作りながら、相馬を見上げる。

「何かご用でしょうか?」

「赤服の女性との経緯を、教えてくれませんか?」

「赤服の女性……ああ、彼女の事ですか……」

桐雄は俯きながら、赤服の女の話をする。

「彼女と会ったのは、会社をリストラされた日の事です。全てに絶望し、生きる気力を失った自分の前に、まるで救いの女神であるかのように現れたんです。そして言われたんです」

“ 希望が欲しくありませんか？ ”

「そして、俺は彼女と寝ました」

「……………」

「全てを包み込むような彼女の包容力に、俺は白夜の向こうを見たかのような感覚に囚われました。それはとても…甘美な感覚でした。でも……………」

桐雄の声が、若干下がる。

「気づいた時には、俺は手術台に縛り付けられてて、化け物になりました……………」

桐雄は「あはは……………」と乾いた笑い声をあげる。

「すみません。彼女の事については、何も知らないんです」

「……………。貴重なお話、ありがとうございます」

相馬は桐雄に一礼し、桐雄のマンションから去る。

相馬の背中を見送ると、桐雄は部屋に戻った。

・マンション・桐雄の部屋・

「彼は帰ったよ」

桐雄は部屋の奥に置かれているソファに腰かけている“赤服の女性”に語りかける。

「まさか、ここまで嗅ぎ付けてくるなんてね」

「……………」

桐雄の言葉を、赤服の女性は黙って聞いている。

「ねえ」

桐雄は赤服の女性に言う。

「もう一度俺に、インフェリアを射って」

桐雄は右腕のシャツを捲り、赤服の女性に右腕を差し出す。

「……………」

赤服の女性は手提げバッグをガサゴソと弄くり、インフェリアが詰まった注射器を取り出し、桐雄に渡す。

赤服の女性からインフェリアを受け取った桐雄は、心の底から歓喜する。

「くくく……これで、アイツを消せる。俺達を引き離そうとする邪魔なアイツを消せる!!」

桐雄は注射器を右腕に刺し、トリガーを押して体内にインフェリアを注入する。

パリーン

桐雄の手から離れた空の注射器は地面にぶつかり割れ、桐雄の身体に変化が起こる。

「ぐう……あああああ!!!!」

筋肉が膨れ上がり、顔を歪み、桐雄は怪物“インファクト”となった。

「グアアアア!!」

インファクトは窓を破り、外へ飛び出した。

「……………」

一人取り残された赤服の女性は、小さく呟く。

「哀れなひと……………」

・霧崎医院・

「エミナ、ただいま戻りましたよ」

「おかえんなさい」

相馬が医院に帰宅すると、エミナはソファに座り、ブスウーと剥れていた。

相馬は荷物を部屋に置く。

「どうしたんですか？」

「なんでもない！」

エミナはイライラしながら、手元のフレアエナジーポットを見つめる。

「あんな奴の挑発に乗ったせいで大損よ……」

自業自得の結果である。

事情を知らない相馬は、エミナに対して溜め息を溢す。

「はあ……。何をそんなにイライラしているんですか？」

「うるっさいわね！ネヤブには関係ないでしょ！！」

「ネヤブ？」

「年齢詐称のヤブ医者、略してネヤブ！！」

「物凄く不本意なアダ名なんですが……」

「フンッ！」

エミナはそっぽを向いてしまった。

「はあ……」

相馬はもう一度溜め息を溢すと、テレビの電源を入れる。

ニユース速報です！現在、グローバルシティの中央地域で怪物が暴れ回っています！！現場の米倉アナウンサー！？

はい。私は只今、怪物が暴れ回っているというグローバルシティの中央地域に居ます。………あっ！御覧ください！！あそこで怪物が暴れ回っています！！

テレビから流れる音声と映像に、相馬は固まる。

「インファクト……」

相馬はアタッシユケースを探す。
しかし、どこにも見当たらない。

「あれ？一体どこに……」

「私……知らない……」

エミナは気配を消してその場を後にしようとする。

「エミナ？」

「ギクツ！！」

その場を離れようとしていたエミナは、あっさりと相馬に見つかった。

「どこに行くんですか？」

「さ……散歩……」

「はあ、そうですか。ああそうだ、因みに」

「な、何……？」

「ここに置いておいたケースを知りませんか？」

「ギクギクツ！！」

エミナは肩を震わす。

エミナの様子に、相馬は背後から怒りオーラを発現させる。

「エミナ？」

「ヒッ？！」

相馬のオーラに、エミナは目に涙を浮かべる。

「もう一度聞きます。ここに置いておいたケース……知りませんか？」

「うっ……うっ……」

エミナは相馬のプレッシャーに圧倒され、洗いざらい全て話した。

「質屋に売ったのですって?!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

相馬は目を見開き、エミナはひたすら土下座する。

「貴女って人は……」

「だって……ちょっとしたでも借金返済の足しになるかもって思ったんだもん……」

「エミナ？」

「ヒッ?!」

再び、相馬から怒りオーラが揺らめく。

「うう…ごめんなさい……」

「因みに、いくらくらいで売れました？」

「お金貰えなかった。これと交換だって」

エミナはそう言って、フレアエネルギーポットを取り出し、相馬に見せる。

「これは…エネルギーポット……。質屋の店主さんが、これを持っていたんですか？」

「う、うん」

相馬は暫く考えると、フレアエネルギーポットを握り締める。

「その質屋に案内してもらえますか？」

「わ、分かった……」

エミナは、相馬を質屋へ案内する。

「……………ねえ、相馬」

「なんです?」

「許してくれる?」

「……………。駄目です」

「そんな?!!」

・とある質屋・

「いらっしやいませー」

質屋の店主が、相馬達を出迎える。

「あの、すみません。こちらにアタッシュケースに入ったベルトがあると思つんですが……………」

「ああ…例のアレですね」

店主は店の奥の倉庫に入り、アタッシュケースを持ってくる。

「おいくらで売って下さいますか?」

「そうですね……………48万くらいですかね」

店主の言葉に、相馬の背後に立っていたエミナが「なぬっ?!」と

目を剥く。

「さっきと言ってる事が違う!!値段が付けられないって言ったじゃない!!」

エミナは店主にクレームを付ける。

それに対し、店主は柔らかな笑顔で答える。

「世の中そんなもんです」

「キーツ!!」

エミナは「悔しい悔しい!」と喚く。

「48万で買い取りましょう」

相馬はそう言うと、懐からブラックカードを取り出す。

「「えっ?!」」

店主とエミナは目を見開く。

「「ぶ、ブラックカード?!」」

「ひょっとして、カードは使えないんでしょうか?」

店主の反応に、不安になる相馬。

店主は首を左右に激しく振る。

「めめめ滅相もございません!!」

店主は震える指先でブラックカードを相馬から受け取り、レジにデータを打ち込む。

「……………こちらにご署名をお願いします!!」

相馬は店主からボールペンを受け取り、領収書に署名を書き記す。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます!!」

相馬から領収書を受け取った店主は、相馬にアタッシュケースを渡す。

「あ、そういえば」

相馬は何か思い出したかのように、店主に尋ねる。

「あの、これをどこで手に入れたんですか?」

相馬は店主に、フレアエナジーポットを見せる。

「え……と……………。企業秘密という事で」

店主は汗を流しながら、目をキョロキョロさせる。

「……………分かりました。あまり詮索はしない事にします」

相馬はそう言うと、エミナに声をかける。

「エミナ、帰りますよ」

「う、うん…」

エミナは頷くと、店主に「アツカンベー」と舌を出し、相馬と共に質屋を後にした。

「さてと…」

店主はカウンターの下から顕微鏡を取り出す。

「よいしょっと」

顕微鏡に黒いエナジーポット『ロイドエナジーポット』をセットする。

《スコーパー！》

次の瞬間、顕微鏡は人型に変形した。

メデイカロイド第一号『スコーパー』だ。

「スコーパー、彼らを監視してくれるかい？」

《イ・エ・ス》

スコーパーは頷くと、相馬達を追って質屋を後にした。

・グローバルシティ・中央地域・

「米倉さん、もう帰りましょうよ。ほら、他のテレビ局の人達も皆避難したみたいですし」

「何言ってるの。だからこそ、チャンスなんじゃない。これはウチの局が全面独占するんだから!!」

「もう……どうなっても知りませんからね!!」

テレビ局『GHK』所属のアナウンサー『米倉レイ子』とカメラマン『山田明宏』が、インファクトが暴れているグローバルシティの中央地域に居た。

「グアアアアア!!!!」

インファクトは雄叫びをあげ、レイ子は笑みを溢す。

「これよこれ。お茶の間を騒がす大ニュース……これこそ、私が求めた取材!!」

「い、命がいくつあっても足りませんよ!!」

「お黙り！喋ってる暇があるなら映像を撮りなさい！！」

「は、はひひ！！」

レイ子に鞭打たれ、明宏はカメラでインファクトの映像を撮る。

「ご覧下さい！突如現れた怪物は次々と建物を破壊していきます！！」

レイ子はカメラの前に立ち、中央地域の様子の現状を伝える。

ピルルル！

明宏の携帯電話が鳴り、明宏はカメラを片手に持ちながら電話に出る。

「はい、こちら山田」

なにしてやがる、このバカ野郎！！

「へ、編集長?!」

電話の相手は、どうやらレイ子達の上司のようだ。

お前達、もういいからこっちに戻って来い！！

「戻るならとっくに戻ってますよ！！でも米倉さんが

…あつ…」

…

「どうしたの?」

突如、口をあんぐりと開けて固まっている明宏に対し、レイ子は首を傾げる。

おい、……山田？どうした？もしもーし

明宏は思わず携帯電話を地面に落としてしまった。

「米倉さん……」

「何よ」

「う、後ろ……」

「後ろ？」

レイ子は後ろを向く。

「……………え？」

そこには、レイ子達に狙いを定めているインファクトが立っていた。

「山田」

「何ですか？」

「逃げるわよ」

レイ子と明宏は猛スピードで、その場から逃げ出した。

しかし、

「グアアアアアア！！！！」

インファクトはレイ子達を追いかける。

「えっ…ちょ…なんで追いかけてくるの?!」

「だから早く逃げましょって言ったじゃないですかあああああ！！！！」

明宏は「うわぁぁん！」と泣きながら、ひたすら走る。

・とある質屋・

「さあて、アレを使ってみますか」

店主は倉庫の中に入り、灯りを付ける。

そして、緑色のバイクに触れる。

「アロマ専用マシン。『マシンオペレーター』」

店主は倉庫の壁に取り付けられたレバーを引く。

「起動開始！」

ブォンブォンブォオオオン！！

マシンオペレーターのアクセルが入り、倉庫の壁が左右に開く。

するとトンネルの入り口が出現し、マシンオペレーターは、トンネルに向けて発進した。

「行ってらっしゃい、マシンオペレーター」

店主はハンカチ片手に、マシンオペレーターを送り出した。

・グローバルシティ・中央通り・

「こっちにも居ませんでしたね」

「もうクタクタだよ」

相馬とエミナは、インファクトを探しているが、中々見つからない。

「一体、中央地域からどこに行ってしまったんでしょうか？」

「もう帰ろーよ」

「ダメです」

「ブーブー！」

エミナは顔を膨らませてブーイングする。

ブオンブオンブオオオン！！

「ん？」

謎の爆走音。

相馬とエミナは、音のした方向を見る。

マシンオペレーターが、相馬達目掛けて向かってくる。

「な、何?! あれ!!」

「バイク…でしょうか……?」

マシンオペレーターは、相馬の目の前で止まる。

《インファクト・ハンノウ・ホクセイ・ホウコウ》

「?!」

マシンオペレーターから発せられた電子音に、相馬は目を見開く。

「これを使えば、インファクトの居場所が分かるかもしれません！」

「マジで?!」

相馬は早速、マシンオペレーターに跨がる。

「よっし、レッツゴー!」

エミナはマシンオペレーターの後部座席に座ると、相馬はマシンオペレーターのナビゲーションシステムに従って、インファクトのもとに向かう。

・グローバルシティ・港・

「はあ……はあ……」

レイ子と明宏は、グローバルシティの港まで逃げてきていた。

「もう……無理ッス」

明宏は『ボタンッ!』と、倒れてしまった。

「うっ……一年分走った気がする……おええ……」

レイ子は気分が悪くなり、嘔吐感に苛まれる。

「グアアアアアア!!」

しかし、インファクトはまだ二人を追跡していた。

ここは港。

逃げ場はもう、ありはしない。

「勘弁して下さいよ……だから俺は嫌だったんすよ……」

「あはは……私はまだ……こんな所で死ぬような女じゃないわ……もつと、もつと世の中の特大ニュースを報道していくんだから……」

「グアアアアアア!!」

ビクッ!

インファクトの咆哮に、明宏とレイ子は肩を震わす。

「誰か……助けて……」

ブオオオオオオン!!

「?!!」

マシンオペレーターの前輪が、インファクトの顔面に激突する。

「グフォ?!」

突然の衝撃に、インファクトは後退りする。

「早く逃げて下さい!!」

相馬はレイ子と明宏に声をかける。

「は、はい!米倉さん、今の内に逃げましょう!!」

「う、うん……」

明宏はレイ子の右腕を掴み、安全な場所と思われる港のシェルターに逃げていく。

「あの人、どうするのかしら?」

シェルターの間隙から、レイ子は顔を覗かす。

「山田、カメラ回して」

「米倉さん、もういい加減に」

「いいから、さっさとさっさと通りにして!!」

「……はい」

強く物を申せない自分に、明宏は自分自身に溜め息を漏らし、カメ
ラを回す。

「キリ…サキ…ソウ…マ……コロス」

インファクトは巨大な拳で相馬を潰そうとする。

しかし、

ガキン!!

相馬はそれを右手のみで受け止めた。

「ナ……ニ……？」

インファクトは渾身のパンチが受け止められた事に、驚きを隠せな
い。

「残念ですね……僕の右手は、“機械”なもので

白衣がはだけ、相馬の右腕の全容が明らかとなる。

「…えっ……？」

エミナ、レイ子、明宏の三人は目を剥く。

相馬の右腕は、銀色に輝く義手だった。

「僕も、本気で行かせてもらいますね」

相馬はインファクトを片手で吹っ飛ばし、アロマドライバーを腹部に装着する。

そして、アロマチューナーにリーフエナジーポットをセットする。

「変身!」

アロマチューナーをアロマドライバーにセットし、サイドレバーを押し込む。

《リーフエナジー》

《チューニング・レボリユーション!》

緑色の鎧に覆われ、相馬は仮面ライダーアロマに変身した。

「ええええ?!」

レイ子と明宏は唾然とする。

「仮面……ライダー」

レイ子はポツリと、小さく呟いた。

「さあて、行きますよ!」

アロマはインファクトを蹴り飛ばす。

「グアアアア!!!」

《ダメージポイント・18》

「まだまだ!!!」

アロマは回し蹴りと裏拳のコンボを決める。

「グファア!!!」

《ダメージポイント・29》

「ふう、中々思うようにダメージが与えられませんね」

「相馬!」

エミナがアロマに語りかける。

「今日、あの質屋で手に入れたアレ、使ってみたら?!」

「そうですね。使ってみますか」

アロマは左腰にセットされているエネルギーポットの収納ケース『ポットケース』からフレアエネルギーポットを取り出す。

アロマはアロマドライバーからアロマチューナーを抜き取り、リーフエナジーポットとフレアエネルギーポットを入れ換え、アロマドラ

イバーに再びセットする。

《フレアエナジー》

《チューニング・レボリューション!!》

すると途端に、紅蓮の炎がアロマを覆う。

「あ…ああ……」

アロマの脳裏に、ある情景が浮かぶ。

助けを求め、炎に吞まれていく仲間達。

彼等の命が、目の前で簡単に尽きていく。

「あああああ!!」

アロマは頭を押さえ、フレアエナジーポットのエネルギーを拒否する。

《エラー・レボリューションオフ》

アロマドライバーは吹っ飛び、エミナの足元に転がる。

アロマの変身が解けた。

「相馬!」

エミナはアロマドライバーを回収し、相馬のもとに駆け寄る。

「もう…嫌だ…仲間が…仲間達が…何故、僕だけ生き残ってしまっただ…」

相馬は頭を押さえ、懺悔するかのように、何かに取り付かれたかのようにブツブツと呟く。

「相馬、しっかりしてよ！相馬！！」

「はっ…！」

エミナの言葉で、相馬の意識が戻る。

「相馬、早くあいつを倒さないと…！」

「ですが…僕には…」

エミナはアロマドライバーを見つめる。

「だったら、私が戦う」

「……………え？」

「私が、相馬の代わりに戦う」

「そんな！無茶ですよ…！」

「じゃあ誰がああ怪物を倒すのよ…！」

「……………」

その言葉に、相馬は押し黙る。

「相馬は、ここでじっとしてて」

エミナはそう言うと、相馬のもとを離れた。

「待たせたわね、化け物」

「グウウウウ……」

エミナはアロマドライバーを腹部に装着する。

そして、アロマチューナーをアロマドライバーにセットする。

「さあ、第二ラウンドの開始よ……変身……」

サイドレバーを押し込む。

《フレアエナジー》

《チューニング・レボリユーション！！》

紅蓮の炎がエミナを包み、エミナは紅蓮の装甲を持った仮面ライダーアロマ『フレアモード』に変身した。

アロマの右手に、刃先が炎の形を模した大剣『フレアカリバー』が出現する。

「はあああああ……」

アロマはフレアカリバーでインファクトを切り裂いていく。

「グアアアアア!!」

《ダメージポイント・36》

フレアカリバーの刃先から噴出した炎によって、インファクトの皮膚が爛れる。

「グウオオオ……」

皮膚が爛れた事で、インファクトの勢いが無くなる。

「今がチャーンス」

アロマはアロマチューナーをドライバーから取り外し、フレアカリバーにセットする。

アロマチューナーのトリガーを押し込む。

《ファースト・チャージ》

フレアエナジーポットに蓄積されていたエネルギーが、フレアカリバーの刃に集束していく。

十分エネルギーが溜まり、アロマはフレアカリバーのグリップの底を押し込む。

《ファイナリング・チャージ!!》

「はあああああー!!」

アロマは必殺の一撃『フレアエナジーブレイク』をインファクトに放つ。

「グアアアアアアー!!」

フレアエナジーブレイクをまともに喰らったインファクトは、そのまま爆発した。

「あ…ああ………」

裸の男性 桐雄がその場に倒れる。

「安藤…桐雄さん？」

相馬は桐雄に駆け寄る。

「どうして貴方が………」

「あれだけが…インフェリアだけが……俺と彼女を繋ぐ…唯一の架け橋だったから………」

「彼女……赤服の女性の事ですか？」

「ああ………」

「好き…だったんですか？」

「好きなんてものじゃない……愛していたんだ……もう生きる希望が無かった俺に、光をくれた……」

桐雄は息絶え絶えな口調で、一番言いたかった事を呟く。

「彼女と会えて……良かった。幸せな……人生だったよ……」

そして桐雄は、目を閉じた。

「安藤さん……?」

相馬は桐雄の肩を揺さぶる。

しかし、桐雄は起きない。

「何が会えてよかっただ……何が幸せな人生だっただ……安藤さん、貴方は……生きる事を諦めただけだ……」

相馬の目から涙が溢れる。

「また……救えなかった……結局僕は……また……くそおおおおお！
！……」

グローバルシティの港に、過去に傷を負った男の咆哮が響き渡った。

現在の借金ポイント

【000'480'3】

CHART:02【炎の剣】（後書き）

次回、

CHART:03【追跡者の魔の手】

なんとなく味の無い後書きなので、こんなコーナーを設けてみました。

【もし、仮面ライダーアロマが商品化されたら】

【CM】

人類救済システム第一号……ついに登場!!

アロマチューナーにリーフェナジーポットをセット。

ドライバーにセットして、サイドレバーを押し込め!!

「変身!!」

《リーフェナジー》

《チューニング・レボリユーション!!》

仮面ライダーアロマに変身!!

アロマチューナーのトリガーを押し込み、

《ファースト・チャージ》

サイドレバーを押し込んで、決めろ！必殺の一撃！！

《ファイナリング・チャージ！！》

DX！アロマドライバー！！

こんな感じですかね。

CHART:03【追跡者の魔の手】(前書き)

勉強の合間をぬってやっと一話が完成しました。

では、ごんごん

CHART:03【追跡者の魔の手】

・GHK・本社ビル・

「編集長、ボツってどういう事ですか!!」

レイ子はGHKの放送部門編集長『川岸稔』に抗議する。

「言葉通りの意味だ」

稔はデスクに着くと、懐からタバコを取り出し、ライターで火を点ける。

「意味が分かりません!もっと具体的な説明を要求します!!」

「フー……。上からの圧力で、あの映像の放送は禁止。最初に放送した怪物が町を破壊する映像も、ただの特撮紛いの偽物って事で、あの映像を放送したテレビ局全社が訂正の謝罪会見を開いたみたいだしな」

稔はリモコンのスイッチを押し、テレビを点ける。

すると各局のテレビ局のトップが頭を深々と下げ、「この度は、申し訳ございませんでした」と謝罪している。

「そんな……。おかしいですよ、そんなの」

「米倉。世の中には、知らない方が幸せってもんがいくつもある。」

今回の件もそうだ。お前達が映した映像は、イタズラに市民の恐怖心を煽るだけだろう」

「そうだとっても!!」

レイ子の強気な態度に、稔は溜め息を溢し、タバコの先を灰皿に押し付ける。

「そんなに放送したいなら、上の連中に身体を売るんだな」

「なっ?!」

稔の言葉に、レイ子は言葉を失う。

「放送したいんだろ？」

「でも、身体を売るなんて……」

「なら、もう諦める」

「でも……!!」

「米倉。俺達が市民に伝える事なんて、全ては上の連中が決める事だ。……だがまあ、今回の件は少し怪しいな」

稔は少し窓に目を向ける。

「怪しいって、どどういう事ですか?」

「いやなあ、俺の警察の知り合いに『ユキ』っていう期待のルーキ

「が居るんだがな。ソイツが今、警察の上層部が捜査を打ち切った事件の闇捜査をしているらしい」

「闇捜査?!それって違法じゃ……」

「ああ、闇捜査は闇捜査と並ぶくらいの、刑事だったら禁じられたタブーの領域だ。だが、踏み入れるだけの価値はある」

「と言つと?」

「打ち切られた事件って言うのは、今回の件とは別の怪物騒ぎだ」

「えっ……それじゃあ……」

「ああ。俺達だけじゃない…警察のお偉いさんもグルって事だ。知り合いの新聞社に問い合わせても、結果は同じ。いずれもトップが情報を規制してやがる」

「でも、それじゃあ…この前の事件の被害者…中央地域の人達は、真実が隠蔽されているって告訴するんじゃない……」

「勿論、俺もそう思った。だから中央地域に出向いて聞き込みを試みたんだ。だが、全員口を揃えてこう言いやがる」

“ そんなものは知らない ”

「彼らは、本当に何も知らないみたいだった。まるで事件当日の記憶が丸々欠落したみたいだった。しかも、怪物によって破壊されたはずの建物が、綺麗さっぱり元通りになってたな」

「そんな……でも私はこの目で実際に！！」

「ああ、分かっているさ。だからこそ、キツネに摘ままれたみたいで後味が悪い。真実は、その残骸さえ残さずに消えちまった。正に、真実は闇の中ってやつだな」

稔は「全く」と言い、顔ん歪める。

「こりゃあ……今回の件とそれに関連する全ての事件対して、国家レベルで揉み消そうとしてやがるんじゃないか？」

「一体……何のために……」

「俺が言える事は只一つ。米倉……絶対に関与するなよ」

稔はレイ子に釘を打つ。

「編集長。悪いですが、私には真実を伝える義務があります」

「真実を伝えてどうする。真実を伝える事は、嘘を吐くよりも罪な事なんだぞ」

「だとしても、です」

レイ子は稔に言う。

「私は自分を偽りたくありません」

レイ子は稔に背を向けてその場を去った。

「精々、命を粗末に扱つなよ……米倉」

稔は溜め息を吐きながら、米倉の身を案じる。

・ G H K ・ 整備室 ・

「今日こそ言つてやる。言つてやるんだ」

明宏はカメラの整備をしながら、ある固い決意をしていた。

「山田、行くわよ」

すると、整備室にやってきたレイ子が明宏に声をかけた。

明宏はある決意のもと、レイ子に反論する。

「米倉さん。もう俺はアンタとは」

「ああ？今私の事、“アンタ”って言った？ぶち殺されたい？」

「勿論俺は一生米倉さんについていきます！米倉さんの事をアンタって言つてません！！」

レイ子が発した殺人光線によって、明宏の決意は粉々に砕け散った。

(俺って男は……………)

前回の一件で、レイ子と遠出する事に辟易としていた。だからこそ、強く決意していたのだ。

もう、レイ子と一緒に取材しない、と。

しかしまあ、そんなものはレイ子の殺人光線によって破壊されたわけだが。

「さあ、張り切っていくわよ!!」

「は〜い……………」

張り切るレイ子、しょげる明宏。

頑張れ、明宏。

・霧崎医院・

「相馬……………」

「……………」

相馬はソファに持たれかかったまま、ずっと黙り続けている。

「相馬」

エミナの声に、全く反応しない。

「ネヤブ」

試しにアダ名で呼んでみるが、全く反応はない。

「……………」

相馬はただ、天井のある一点を見つめ、物思いに耽る。

(フレアの炎……………あれは、あの感覚に似てる……………)

なんでだ

「ッ?!」

頭の中で声が響く。

なんでお前だけ……………なんで!!

「あ……………あ……………」

相馬は頭を抑え、響く声を振り払おうとする。

なんでお前だけが平然と生きている!!

相馬の周りを、大量の死霊が囲む。

「違う……僕は、生きてくなかった……」

お前のせいで俺達は……！

「許して……下さい。僕は……僕は……」

「相馬……！」

エミナが相馬の肩を揺さぶる。

「エ……ミナ……？」

「そつよ、私よ……！」

「み、皆はどこですか？」

「皆……」

エミナは辺りを見渡す。

「ここには私とアンタしか居ないわよ？」

「そつ……ですか」

相馬は安堵の息を溢しながら、額を抑える。

「あれは…幻だったんですね……」

相馬は「アハハ…」と、乾いた笑い声を漏らしながら、リビングの窓から空を見上げる。

（皆、もう少しだけ…待っていて下さい。僕のやるべき事が終わったら、すぐにそっちに逝きますから）

どうか、もう少しだけ…皆の命を僕に……

相馬は少し俯くと、エミナに笑顔を向ける。

「医院、そろそろ開けましょう」

相馬は張り切って医院の準備をするが、その姿にエミナは益々心配になる。

「ねえ、相馬」

「なんですか？」

「これ、どじするの？」

エミナは相馬にフレアエナジーポットを見せる。

「……………。それは、エミナが持っていて下さい。僕にはそれは使えませんから」

「……え、どうして？」

「僕は…炎恐怖症なんですよ……」

「炎…恐怖症？」

エミナの問いに、相馬は黙って頷く。

再び、相馬の脳内に広がる。

炎に包まれる焼け野原。

助けを求め、相馬に手を伸ばす亡霊達。

しかし、相馬はそれから目を背け、ひたすら逃げ続ける。

『ごめんなさい……ごめんなさい!!』

逃げても逃げても追いかけてくる者達。

「…相馬!!」

「…っ!!」

相馬はエミナに肩を揺さぶられ、正気を取り戻した。

「す、すみません……また、意識が…」

「今日は診療やめようよ、なんか調子悪いっばいし！」

「それは、できませんよ」

相馬は額を抑えながら、首を横に振る。
その表情は苦悶に満ち、脂汗が浮かんでいた。

「今日だって、こんな僕に助けを求めている人がいるんですから。
ほら」

相馬はエミナに診療の予約名簿を見せる。

「……………って、一人しかいないじゃん」

「あはは……………」

エミナは咎めるように相馬に言う。

「今日は休みなさい」

「それは……………どうでしょうか」

相馬はエミナから顔を反らす。

「休みなさい」

「それはどうでしょうか」

「や・す・み・な・さ・い！」

「そ・れ・は・ど・う・で・し・ょ・う・か」

エミナは相馬に視線を合わせる。

相馬はエミナから顔を反らす。

「……目合わせなさいよ」

「……合わせる意義がありません」

「今日ぐらい、休んでもいいでしょ。どうせ予約は一人なんだし」

「数は重要じゃないですよ。命は、何に対して同じ重さなんですか。たとえ一人だとしても、僕からすれば……大きな命です」

相馬は自分の右手の掌を見つめる。

「人の命は、僕の手に残るくらい……大きなものです。一人の命も、僕には大きいんですよ。一人の命も、粗末に扱っていけないんです」

相馬は手をギュツと握り締め、エミナに初めて視線を合わせる。

「相馬……。相馬の過去に、一体何が……」

プルルルッ！！

すると、突然電話が鳴り出した。

「ちょっと失礼しますよ」

相馬は電話に出た。

霧崎先生ですか？

「ああ、上山さん。どうしました？」

折角予約したんですが、ゴホツゴホツ！

「大丈夫ですか？」

いや、すみません。風邪の症状が思いの外悪化してしまいました……ちよつととても外出できる状態じゃないんで、予約をキャンセルしたいんですが……

「いや、キャンセルする必要はないですよ」

えっ、でも……

「僕がそつちに行きますから、キャンセルする必要はないです」

そんな……わざわざ来ていただかなくても……

「遠慮する必要はないですよ。僕は医者ですから……。医者は、人を治して南保ですからね」

……では、お言葉に甘えますか

「はい、いくらでも甘えて下さい」

相馬は患者の上山に、「では、三十分程でそちらに向かいますね」と伝え、電話を切る。

「さて、と。ではエミナ、僕は少し出かけますね」

相馬はそう言うと、医療器具の入った鞆とアタツシユケースを手に

持つ。

「あれ？ベルトも持っていくの？」

「ええ。またどっかの誰かさんに質屋に売られたらたまったもんじやありませんからね」

「もう売らないし！っか、あの質屋にはもう二度と行かないから
！！」

「“あの質屋”という事は、裏を返せば別の質屋に売りに行くという事ですね」

「え…：？」

相馬の言葉に、エミナは首を傾げる。
そんなエミナを、相馬は訝しげに見つめる。

「どうしたんですか、エミナ？」

「相馬、この町には質屋は一店しかないんですよ？」

「は？」

相馬はエミナの言葉にポカンと呆けるが、少しして「ああ、なるほど」と言った。

「エミナ。あの質屋の店主に何か言われたでしょ？」

「何かって？」

「この町には質屋はここだけ”みたいな事ですよ」

「ああ……うん、言われた」

「それ、嘘です」

「ええ?!」

「少なくとも質屋は五、六店はありますよ。この町には」

「そ、それじゃあ……」

「あまり他人を馬鹿正直に信じない事をオススメしますよ」

エミナはクワツと顔を上げ、叫んだ。

「騙されたああああ!!」

「だから借金なんて抱え込む羽目になるんですよ」

「あたしの借金は元と言えば、アンタのでしょ!!」

「……その事なんですが、エミナ」

相馬は真剣な表情でエミナに言う。

「僕は借金なんてした覚えがないんですよ」

「しらばっくれる気?!」

「しらばっくれてるんじゃない、本当に知らないんですよ」

「あたしもう、他人を馬鹿正直に信じないから!」

「はあ……心が乏しい人だ」

「アンタが言ったんじゃない!他人を馬鹿正直に信じるなって!」

「ケースバイケースですよ」

「身勝手!」

「それが大人の特権ですから」

相馬は「フッフ…」と笑い、エミナは悔しそうに顔を歪める。

「さて。では、僕はそろそろ行きますね」

「うう……行ってらっしゃい」

「はい、行ってきます」

相馬は医療器具の入った鞆とアタッシュケースをしっかりと握り、患者の元に向かった。

メディカルカンパニー・診察室

メディカルカンパニーとは、カンパニー総帥『星川 東十郎』が経営する大型医療センターであり、各国のエリートドクターのみで構成された医療チームの診察を格安価格で提供されているのが売りである。

それ故に、このメディカルカンパニーが設立されて以来、このグローバルシティ内の医院は相次いで潰れている。

ここは、そんなメディカルカンパニーの診察室の一室であり、診察を受けている年若い青年がいた。

青年の名前は『加賀 剛毅』。
職業はボクサーである。

「先生、俺の身体は一体どうなっちゃったんですか?!」

「……………」

剛毅の問いに、医師は難色を示す。

「……………落ち着いて、聞いて下さいね」

医師はそう言うと、看護師からレントゲンを受け取り、剛毅にレントゲンのある一点を指差して見せる。

「この動脈壁に映っている影……………これは、脳動脈瘤です」

医師は深刻な形相で、剛毅に語る。

「脳動脈瘤とは、動脈壁の脆弱性等に起因した先天的な血管壁が瘤状に変化したものであり、くも膜下出血の最大の原因とも言われています」

「それじゃあ……」

「このまま放置すれば最悪の場合、脳動脈瘤が破裂してくも膜下出血を患う可能性があります。……残念ですが、ボクサーを続けるのは……医師である私は反対です」

「でも……!!」

剛毅は医師にすがりつく。

「今から治療すれば、大丈夫じゃないんですか?! まだ初期症状ですし!!」

剛毅の必死な言葉に、医師は首を横に振る。

「たとえ初期段階での治療を施したとしても……再発の可能性が高いですよ」

「……………」

剛毅はガツクリと肩を脱力させ、涙を流す。

「先生え……なんとかならないんですか。俺は、ボクシングを諦め

たくない!!」

「……残念ですが、こればかりは……」

「くそ……くそっ!!」

剛毅は自身の膝を殴る。

「先生……あなた医者なんだろう？人の命を専門に扱う職業なんだろう？……エリートドクターなんだろう?!」

その後、剛毅は医者胸ぐらを掴み、今にも殺す勢いで詰め寄る。

「だったら助けってくれよ!!俺の人生を救ってくれよ!!そんな簡単に見捨てんなよ!!」

「か、加賀さん……落ち着いて下さい!!」

「頼むよ!頼むから、俺からボクシングを奪わないでくれよ!!諦めないでくれよ、先生!!」

「現代の医学では……限界でして……」

「……あなたもか……」

「……え?」

剛毅は医師から手を離し、医師を見下ろす。

「あなたも所詮……親父と同じなのかよ……」

剛毅はそう言うと、診察室を後にした。

剛毅は病院の廊下を歩きながら、ある事を思い浮かべていた。

親父が死んだ。

死因は圧死。

俺達家族の元に届いた時は、ミンチ状になった親父だった。

二十年前

「嘘よ！こんなの嘘よ！！」

母の悲痛な叫びが、式場の控え室に木霊する。
今の俺達の姿は、全身黒の喪服だった。

「なんであの人が、こんな目に合わなきゃいけないのよ！！」

親父は医者だった。

世間は親父を最高の医者だと称えた。

だが、父として最低だったと思う。

親父は、家庭より職場を優先する人だったから。

何故なら、親父は別の女性を愛し、その上で母と結婚したから。
その女性は、母と瓜二つの女。
双子の、姉だった。

それでも、母は親父を愛していた。

たとえ、死んでしまった姉の身代わりであろうとも。
俺は、親父が許せなかった。

「親父なんて、死んでよかったんだよ……」

パンツ！

頬に痛みが走る。

目に涙を溜めた母が、睨むような目付きで俺を打った。

「実の父親を、死んでよかったなんて言わないの！！」

親父が母に残した傷跡は大きい。

たとえ親父が死んでも、母は親父の幻影に一生惑わされるのだろう。

それと同様に、母は実の姉の幻影にも惑わされるのだろう。

愛した故に奪い、憎んだ故に殺した両者に。

現在

診察室

剛毅が去った後の診察室にて、医師は内線による通話をしていた。

「社長。本当にこれで良かったんですか？」

何か不満か？

「くも膜下出血程度の病気……ましてやその初期段階は、今の医学ならば簡単に治療できます。それなのに……」

病気を治すだけが、医者ではないだろう？人を救う事もまた、医者としての大切な使命だ

「なら何故!？」

私は彼から人生を奪ったのではない。曲がってしまったレールを矯正しただけだ

「曲がってしまった……レール？」

そうだ、彼にはやらねばならない使命がある。それは、彼が“加賀博信”の子として生まれた時から、既に決定している

「加賀博信……“E計画”の研究メンバーだった男ですね」

ああ。二十年前のあの日、全てはあの日から始まったのだ

「……………。貴方が考案した人類救済システムは、本当に世の人々のためなのですか？」

何が言いたい？

医師は語彙を強めて言う。

「人の命は貴方の玩具おもちゃじゃない」

……クククッ

電話の相手は小さく笑うと、軽い調子で言う。

この世の全ては、私の…私だけのゲーム台だ。私の決定で、物語が進む。私の暇を潰してくれる、最高の物語がね。君も、その物語システムの一部に過ぎないのだよ

「なんですって？」

電話の相手は、軽い口調から一転して感情の籠らない低い声で、医師に忠告するように言う。

脇役モブが調子こくなって言うんだよ

「も、モブ？」

そっだよ。分かったなら、私は仕事に戻らしてもらおうよ。それじゃーね

ブッッ

ツーツー

電話の切れた音が、診察室に木霊する。

上山家

「先生、わざわざ来てくれてありがとうございます」

病人だった上山は、相馬に感謝の声をあげた。

「仕事ですからね。また、何かあれば連絡下さいね」

そう言うと、相馬は上山家を後にした。

「それにしても、妙ですね」

相馬は辺りを見渡し、訝しげな表情を浮かべる。

「誰かに見られているようだ……」

アタッシュケースを握る手を強める。

「出てきたらどうですか、“赤服の女”」

相馬がそう言うと、マスクとサングラスをかけた赤服の女が物陰から姿を現した。

「……気づいてたのね」

「ええ。何故僕に付きまとう？」

「それは…貴方がアロマを持っているから」

「これを？」

相馬は赤服の女にアタッシュケースを見せる。

「それは本来、我々が運用するはずだったシステムだ」

「君達が、かい？」

赤服の女は無言で頷く。

「アロマシステムは、インファクトの抑制システムとして開発する予定だった。それを、メディカルカンパニーが横取りした……。私は、それを取り返しに来ただけ……」

「メディカルカンパニー……。なるほど、アロマシステムが僕のもとに届けられたのは、星川先生の仕業か……」

相馬は一瞬だけアタッシュケースに目を向けると、すぐに赤服の女に視線を戻した。

「なら、尚更これを君に渡すわけにはいかない。君が、インフェリアを市民に提供する限りはね」

「インフェリアは人類の光だ。アロマシステムは、その光を邪魔す

る闇だ」

「それは違いますね。インフェリアは人々を狂わす……魔性の薬品だ！」

「なぜそう言える？」

「あの薬の危険性、異常性は……僕が一番よく知っていますからね」

「……………。そういえば、そうだったわね」

赤服の女は一瞬俯くと、相馬を見つめる。

「皮肉なものね。インフェリアを開発した当の本人が、インフェリアを否定するなんて」

「……………！」

相馬は右腕を握る。

「あら？右腕が痛むの？」

「貴女には、関係ない！」

「フツッ。そりゃあ痛むでしょうね。何せ貴方の右腕は、アースに食い潰されたのだものね」

「っ？！」

相馬は目を見開き、途切れ途切れの言葉を繋げて辛うじて声を出す。

「何故…それを……」

「“あの日”生き残ったのが、貴方だけとは限らないでしょ」

「ぼ、僕以外に生き残った人間が居るのですか?!」

相馬は赤服の女と距離を縮めようとするが、赤服の女はその分後ろへと後退し、相馬と距離を取る。

「さあ、雑談はこれでおしまい。アロマシステムを返してもらおうわ」

赤服の女は懐から注射器を、相馬に向けて投げる。

「くっ!」

相馬は首を曲げて注射器をかわす。

相馬にかわされた注射器は、相馬の背後に歩いていた野良犬に当たった。

「キヤウ?!」

注射器の薬品が野良犬の体内に注がれる。

「あら?犬に当たるとは予想外ね」

「っ!早く抜かないと!!」

相馬は野良犬に駆け寄る。

「無駄よ。もうじきその犬はインファクトとなるわ」

赤服の女がそう言うと、野良犬の目が充血し、牙が剥き出しになる。

「ゲウウウウウー!!」

野良犬の身体が膨らみ、人間の何十倍もの大きさとなった。

「そんな……」

相馬は顔を歪め、インファクトとなってしまった野良犬を見上げる。

「さあ、霧崎相馬からアロマシステムを奪いなさい」

赤服の女はインファクトに命令すると、インファクトは相馬を睨み付ける。

「ゲガアアアアア!!」

インファクトは相馬を踏み潰そうと前足を勢いよく下ろす。

「くっ!」

相馬はそれを間髪避けると、アタッシュケースを開けて、アロマドライバーを腹部に装着する。

「こっするしかないみたいですね……」

相馬はアロマチューナーにリーフエナジーポットをセットし、

「変身!!」

アロマドライバーにセットして、サイドレバーを押し込む。

《リーフェナジー》

《チューニング・レボリユーション!!》

緑色の装甲に覆われ、相馬は仮面ライダーアロマに変身した。

「グガアアアア!!」

インファクトは飛び上がり、アロマに爪で飛びかかる。

「くっ!!」

アロマはそれをなんとか片手で受け止める。

「グウウウウ!!」

インファクトの腕の筋肉が膨れ上がり、力で押しきろうとする。

「こ……のっ!!」

アロマは腕に一時的に力を入れ、一瞬だけインファクトを後退させると、インファクトを右足で吹っ飛ばす。

《ダメージポイント・36》

「グファアアア!!」

インファクトは建物に激突し、建物に穴を開けた。
インファクトは苦悶の声をあげながら、アロマを憎々し気に睨み付ける。

「グウウウウウ……!!」

「現在の合計HPは、107。まだまだ先は長そうですね」

アロマは腕を振り上げ、脇を絞めた戦闘スタイルを取る。

霧崎医院

「暇だなあ」

エミナは医院のソファに横になつてくつろいでいた。
相馬が出ていった後、患者は誰一人として来ない。

エミナは気分転換にテレビを点ける。

身体の違和感……それは貴方への身体からの危険信号。そんな時、
貴方を救えるのは格安・優良のメディカルカンパニーです!!各国
のエリート医師を集めた最先端医療を驚きの価格で我々は貴方に提
供します!

軽快なBGM、CMの端々に写る誰もが一度は聞いた事のある医師
の名前。

なにより、診察料が馬鹿みたいに安い。
安すぎる。

保険証提示で一回の診察料、たったの八百円。

「……………こりゃあ、この医院に客が来ないわけだな……………」

エミナは溜め息を吐き、テレビの電源を切った。
再びソファに横たわると、

ピンポーン

インターホンの音が医院内に木霊した。

「え、嘘……………もしかして患者さん？」

エミナは目を見開くと、ソファから立ち上がり、玄関におそるおそる向かう。

玄関の鍵を開け、顔を覗かす。

「……………誰ですか？」

「久しぶりだねえ。エミナちゃん」

三人の来訪者の方々は皆、頬に十字傷を持っている恐ろしいお兄さんでした。

「ひ、久しぶりですねえ……………アハハ」

さあ、どうする、エミナ？

CHART:03【追跡者の魔の手】(後書き)

次回、

CHART:04【鋼鉄の闘士】

CHART:04【鋼鉄の闘士】

・霧崎医院・

バタンツ！

ガチャ！

エミナは勢いよくドアを閉め、鍵をかけた。

バンバンツ！！

恐いお兄さん達は、突如閉められたドアを叩きながら、声を荒げる。

「エミナちゃん？なんで閉めるんだ？い？！」

「久々に会えたんだ。積もる話もあるだろうから……お兄ちゃん達、ちょっとエミナちゃんとお話がしたいなあ？！」

「主にお金関係だけどね！！！」

鳴り止まないドアを叩く音。

エミナは玄関にうづくまり、両手で両耳を塞いで震えていた。

（来ないで……お願い来ないで！！）

しかし、ドアを叩く音は止むどころか激しさを増す。

「さっさと開けるや、クソガキ!!」

「借りたモンはきっちり返すってママに習わなかったのか? ああ?」
「!」

「返す宛てが無いなら、俺達がイトコ紹介すからさ!!」

恐いお兄さん達三人は、口を揃えて言う。

「」「」「さっさと面出せや、ゴロア!!!!」「」「」

お兄さん達の声に、エミナは完全に腰を抜かす。

「お願いだから……帰ってよ!!」

それが、エミナが精一杯振り絞って出した声だった。

だが、それは油に火を注ぐ結果を招くだけだった。

「調子こいてんじゃねえぞ……てめえ、自分の立場が分かってんのか? アアン?!」

「こつちとしても借りたモンをさっさと返してくれりゃあ、なーんの文句もねえんだよ。つまりな、全部エミナちゃん次第なんだよ!」
「!」

「……………まあまあお二人さん」

すると、恐いお兄さん三人組の内の一人が、他二人を宥める。

「エミナちゃんはとっても頑固だ。……………“アレ”を使うべきじゃないか？」

「……………だな」

二人は互いに目を合わせ、『ニヤリ』と笑う。

「……………？」

エミナは突然静かになった外に疑問を浮かべる。

（諦めて、帰ったのかな？）

おそろおそろドアノブに手をかけると、

「ねえ、エミナちゃん」

「……………っ！！」

（まだ居るの?!）

再び、お兄さん達の声がエミナに向けられる。

だが、その声音は先程とは異なり、穏やかなものだ。

……………怪しい

「エミナちゃん。お兄ちゃん達ね、話し合ったんだ」

「……何をですか？」

「まだ若いエミナちゃんにいきなり三億払えって言っても、無理な話だよ、やっぱり」

「それは……まあ」

「そこで！優しい優しいお兄ちゃん達から提案が一つあるんだ」

「提案…ですか？」

「そうそう」

胡散臭い話だが、エミナは耳を傾ける事にした。

「提案つて、何ですか？」

「いやあ、実はウチのボスがエミナちゃんの事を大層気に入ってね。エミナちゃんがボスと結婚するなら、チャラにするってさ。良かったね、エミナちゃん。ウチのボスがとっても優しくして」

「けっ…こん？！」

「そうそう。言い換えるとアワーボスが、エミナちゃんとマリーしたいの」

「「なんでわざわざルー語変換した?!」」

なにやらコントのような掛け合いが外でされている。

「む、無理です!!」

しかし、エミナにはお兄さん三人組のコントのような掛け合いには何のリアクションも示さず、首を振りながらお兄さん三人組に訴える。

「あたしまだ結婚したくない!!」

ドア越しで叫んだエミナの言葉に、三人は顔を見合わす。

すると、先程エミナに提案を持ち込んだお兄さんが、乾いた笑いを溢す。

「あはは。エミナちゃんはワガママだなあ……。でも、返す宛てはないんだろ？ だったらこの話は、かなり良いと思うよ。ボスと結婚すれば、三億はチャラだ」

「だからってそんなの、嫌なんです……。好きでもない人と結婚するなんて」

「……ッ」

穏やかだったお兄さんのオーラが、段々歪んでいく。

「こつちが親切に妥協案を提案してんのに……。この……。!!」

ガンガン!!

お兄さんは拳を強く握りしめ、ドアを叩く。

「……」

エミナはドアの打撃音に驚き、ドアから離れる。

「……結構タイプの娘だったらあまり無理強いはしないつもりだったが、もう我慢の限界だ……」

その言葉を合図に、お兄さん三人組は懐から注射器を取り出す。

「こうなりゃあ実力行使で行かせてもらっぜ、エミナちゃん」

三人は「キヒヒ……」と笑いながら、首元に注射器を刺し、トリガーを押して中の液体を体内に取り込む。

パリーン

注射器が割れ、三人の身体に変化が起こる。

「グアアアアアア！！！！」

筋肉が膨れ上がった事で彼らの服がはち切れ、三人はインファクトとなった。

「ブヴァアアアア！！」

インファクトはドアを思いっきり殴り飛ばした。

・町郊外・

「はあああああー!!」

「グブツ?!」

アロマは巨大犬型のインファクト『ケルベロスインファクト』の顔を蹴り飛ばした。

《ダメージポイント・34》

「はあ……はあ……」

アロマは息を切らしながら、ケルベロスインファクトを睨む。

「あと……58!!」

アロマはアロマチューナーのトリガーを押し込む。

《ファースト・チャージ》

リーフエナジーポット内のエネルギーが右足に送られる。

「治療の時間です」

エネルギーが満タンになり、アロマは空中にジャンプする。そして、バックルのサイドレバーを押し込む。

《ファイナリング・チャージ!!》

右足に蓄積されたエネルギーが解放され、アロマの必殺技『リーフ

エナジーキック』がケルベロスインファクトに放たれた。

「グアアアアアア!!」

リーフエナジーキックの直撃を受けたケルベロスインファクトは宙を舞い、はるか後方へと吹っ飛んだ。

ケルベロスインファクトは呻き声をあげると、そのまま身体中の筋肉が収縮し、通常の犬となった。

アロマはバツクルからアロマチューナーを抜いて変身を解き、ぐったりとしている犬に駆け寄る。

しかし……

「……………くっ!」

犬の身体は固まり、呼吸をしていなかった。

インフェリアは身体中の筋肉を急激に増大させ、さらに理性を破壊し、使用者を醜い怪物に変貌させる。

だが、身体に起きる突然の変化……ある種の進化は使用者にかなりの負担を発生させる。

その負担に耐えられなかった者の末路は……………

「うつ……………くっ!!」

相馬は目に涙を浮かべ、右手を握り締める。

「僕はまた……………救えなかった!!」

そして立ち上がると、その場を去った。

・霧崎医院・

あの後、相馬は霧崎医院に帰還すると、医院はボロボロになり、まるで廃墟のようだった。

「なんですか……これ……」

相馬は眉間に皺を寄せると、ゆっくりとした足取りで医院に近づく。破壊されたドア、荒らされた待ち合い室と診察室。さらには……

「差し押さえ？」

差し押さえとなった家具。

相馬は額に手を当て、溜め息を吐いた。

「またエミナ絡みか……」

すると、医院内に押し掛けてくる足音がした。

相馬はそちらに視線を移すと、黒服にサングラスをかけた男が二人居た。

「何者ですか、貴方達？」

「それはこっちの台詞だ」

「その家具とこの医院は、現時刻を以て我々の所有物となった。さつさと立ち退け」

「はあー……」

相馬は髪をクシャクシャと掻き乱すと、男二人を睨む。

「今の僕、すつごい機嫌悪いですよ。誰の許可を得て僕の家を荒らしたかは知りませんが、立ち退くなら……それは貴方達です」

「なんだと？」

二人の内の一人が、相馬の白衣の胸ぐらを掴み、メンチを切る。

「兄チャンよ、あんましこっちの手間を掛けさせんなよ。アアン？
！」

「はあー……。最近の若者は物分かりが悪いですね」

相馬は男の腕を右手で掴み、

「僕は、今、機嫌が悪いです」

一気に捻上げる。

「ぐあっ!?!」

男はその場に踞って苦悶の声をあげると、捻られた腕に目を見開く。腕が、本来向くはずのない方向を向いていたからだ。

「医者には二つ大事なモノがあります。それは……」

相馬は男の髪を掴み上げると、男と目を合わせる。

「“命を預かる責任”と……“人を殺す覚悟”です」

相馬は「フフツ…」と男に笑いかけると、白衣の内側のポケットからオペ用のメスを取り出し、その刃先を男の首元に当てる。

「生憎、僕はその両方を持ち合わせてますよ？」

「ひiiiiiiiiiiii!!」

男は悲鳴をあげ、相棒であるもう一人の男にアイコンタクトを送り、助けを求める。

「ま、待ってる、今すぐ助け」

「少しでも動けば、この男を殺します」

相馬はそう言うと、懐から拳銃を取り出そうとしていた男の手首に向かつてメスを投げた。

メスは男の手首に見事命中し、男は呻く。

相馬は懐からもう一本のメスを取り出し、再び男の首筋に刃先を当

てる。

「当たった場所から察すると、暫くはその手は使えないはずですよ」

「てめえ!!」

手首から血を流す男は、相馬に殴ろうとするが、動きを止める。

自分が動けば、相棒の命は無い。

「相棒さんを助けたいなら、今すぐ差し押さえを取り止めなさい」

「そんな勝手な!」

「この医院も家具も全て僕のもです。これ以上我が物顔をするなら、こちらにも考えがありますよ」

相馬は携帯電話を取り出し、番号を入力して通話ボタンを押した。

数秒のコールの後、電話が繋がった。

はい、もしもし?

「爺か?」

その声……まさか相馬坊っちゃんですか?!

「爺。僕は四十過ぎの中年男だ。もう坊っちゃんという呼び方はやめてくれ」

((四十過ぎ?!))

男二人は目を剥いた。

当たり前だ、相馬は見た目は二十代後半にしか見えないのだから。

それで坊っちゃん。如何用でしょうか？

「霧崎組に始末してもらいたい悪徳金融機関があるのですが、大丈夫ですか？」

悪徳金融機関………でございますか？

「ええ、駄目でしょうか？」

相馬坊っちゃんの頼みとあれば、この爺。たとえ火の中、水の中でございます。さて、一体どのような悪徳金融機関でございますか？

「前田エミナという年若い少女に借金の取り立てをしている所です」

左様ですか、承りました

「では、よろしく願いますよ」

御意に

相馬は通話を切り、男二人に視線を映す。

「聞いている通りです」

「霧崎組つてまさか……」

「あの、霧崎組……?」

男二人は顔を驚愕に染める。

「もう一度だけ言います。僕は今、機嫌が悪いんです。貴方達の取るべき行動は、分かりますよね?」

「「……………」」

男二人は肩を震わせながらその場から立ち上がり、家具に取り付けられていた差し押さえの札を取り去り、「上司に伝えます……」と震える声で相馬に伝えると、霧崎医院を後にした。

ブルルルッ

相馬の携帯電話が鳴った。

相馬は通話ボタンを押し、電話に出る。

「はい、もしもし」

霧崎坊っちゃん。例の悪徳金融機関が割り出せました

「気分が変わりました。その金融機関は“まだ”潰さないで下さい」

左様でございますか

「それと、爺に頼みたい事があるのですが」

なんでございましょうか？

「三億を、用意してもらいたいのです」

相馬は爺に用件を伝えると、爺は笑いながら「三億ですか」と応える。

承知致しました

相馬は電話を切ると、唐突に「……あつ」と呟く。

「エミナの所在、聞くのを忘れてました」

相馬は髪を掻き乱しながら「年を取ると物忘れが厄介ですね」と、乾いた笑い声を漏らした。

・メデイカルカンパニー・受付室・

メデイカルカンパニーの受付室で、加賀剛毅は会計を済ませていた。

医者にボクシングは続けられないと言われ、その目は絶望に染まっていた。

「これから、どうするかなあ」

受付嬢の「またのご利用、お待ちしております」の声を背後に浴び、剛毅は溜め息を溢す。

そのまま家に向かって歩くこと数分。

剛毅の視界に占い師の姿が映り、その前で足を止めた。

「気休め程度に占ってもらうか」

剛毅は、テーブルの上に置かれた水晶に両手をかざしている覆面占い師に尋ねる。

「俺はこれからどうすればいい？」

すると、水晶が赤、青、黄と点滅し、占い師は顔をあげる。

「貴方に、これを渡します」

占い師は、剛毅にアタッシュケースを渡す。

「なんだ…これ？」

「それが、貴方の未来を切り開く」

「そう、なのか？」

「それを使い、この町に蔓延る化け物を全て倒せば、貴方は救われる」

「……………」

剛毅は黙ってテーブルの上に千円を置く。

「気休め程度にはなっただぜ。あと、くれるんなら遠慮なくもらっとく」

そう言つて、アタッシュケースを担いで剛毅はその場を後にした。

・路地裏・

「はあ…はあ……」

エミナはボロボロの衣服を整え、路地裏で息を整えていた。
あの後、命からがら医院から脱出し、三体のインファクトから逃げ
てきたエミナ。

「はあ…はあ……これも、全部…相馬のせいよ!!」

相馬があたし達姉妹に借金を押し付けたから、こんな目に……
相馬なんて…相馬なんて……

「大嫌い……」

エミナがそう呟くと、すぐ近くで爆発音が起こる。

「っ?!」

エミナはそちらに視線を移すと、三体のインファクトがエミナを睨んでいた。

「……エミナちゃん、見いっつけたあ」「」

エミナは身体を震わせながら、少しずつ後退する。

「さて、鬼ごっこはもうおしまいにしようぜ？」

「そっそっ」

「今すぐ三億用意するか、ウチのボスと結婚するか……どっちか選べ」

敢えて名前を付けるとすれば、三体の『ゴーレムインファクト』は、エミナを追い詰めるように、エミナとの距離を詰める。

それと比例してエミナも後退するが、背中が壁に当たる。

(……………しまった！)

逃げ場を、完全に失ってしまった。

「……クククッ」「」

三体のゴーレムインファクトがエミナに近づいてくる。

今すぐこの場で三億を払えるほど、エミナの懐事情は潤っていない。ならば、答えは一つ。

「嫌……嫌よ」

（なんであたしがこんな目に？なんで相馬の借金であたしが苦しまなきゃいけないの？どうして…どうして…！）

エミナの目から涙が溢れ落ちる。

「大嫌い……」

相馬なんか

「相馬なんか……」

相馬なんか

「大っ嫌い！！！！」

「折角助けに来たのに、大嫌いは無いんじゃないですか？」

「?!」

相馬の声が、エミナの上から降ってきた。

エミナは上を見上げると、相馬が上空から下降していた。
相馬は綺麗に着地し、エミナに振り返る。

「探しましたよ、エミナ」

「うっ……うっ……うっ……！」

エミナは相馬に抱き着き、白衣を涙で濡らす。

「来るのが……遅いのよ……！」

「無茶言わないで下さいよ。こっちはありったけの情報網を駆使してやっと探し当てたんですから」

「感動の再会に水を差すようで悪いが、俺達の事忘れるなよ」

ゴーレムインファクトは、自分達をすっかり忘れて再会の余韻に浸っている二人に警告の声を出す。

相馬はゴーレムインファクトに視線を移す。

「なるほど。貴方達がエミナを追ってる借金取りですか……」

「そうだ。分かってんなら、さっさとエミナちゃんをこっちに渡しな！」

「僕としても、厄介事を持ってくるエミナを渡たすのが、僕の平穩な生活を取り戻す最もベストな選択肢でしょう」

「だったら」

「けどね……！」

相馬はゴーレムインファクト達を指差す。

「彼女の姉のリリナに言われたんですよ。“妹を頼む”って」

「お姉ちゃんが……？」

相馬は静かに頷き、ゴーレムインファクトに言う。

「それと、もう貴方達がエミナを追う必要はありませんよ」

「……何っ!?!」

「彼女の借金は、僕が全額返済しておきましたからね」

すると、エミナは相馬の頭を叩く。

「あたしのじゃなくてあんなのでしょうが!?!」

「エミナ、少し黙っていて下さい」

相馬は叩かれた部分を押さえながら、エミナを睨む。

「……ウグツ?!ウアアア!?!」

突然、ゴーレムインファクト達の様子がおかしくなった。彼らは頭を抑え、獣の如く咆哮した。

「……ウガアアアア!?!」

「な、何っ?! なんなの!?!」

エミナは目を見開き、ゴーレムインファクト達を驚愕の形相で見つめる。

その様子を、相馬は「まさか……」と漏らす。

「エミナ」

「何?」

「彼らが貴女の元を訪れたのは、何時頃ですか?」

「ええと……十二時頃だったかな……」

相馬は腕時計の針が差す時刻を見つめる。

「今の時刻は午後三時……既に三時間が経ったとしたら、やはり彼らは……」

「ねえ、相馬」

エミナは考え事をしている相馬に話しかける。

「なんですか、エミナ?」

「あの人は、どうしちゃったの?」

エミナは未だに呻いているゴーレムインファクト達を指差す。

相馬は少し黙ると、エミナに話す。

「インフェリアは使用者の筋肉組織を極限まで発達させ、インファクトへと変貌させます。しかし、長時間の使用は身体にかなりの負担を生み、そして……やがては使用者の精神、理性を破壊するんです」

「えっ……じゃあ……」

エミナが言葉を紡ごうとした次の瞬間、

「っ！！エミナ、危ない！！」

相馬はエミナを左側に突き飛ばす。

激しい破壊音の後、相馬とエミナは自身の間にあった壁を見つめる。

「っっ?!」

壁は一体のゴーレムインファクトによって、完全に破壊されていた。

「ヴウウウウ……ヴァアアアアア!!!」

ゴーレムインファクトはエミナに向かって咆哮し、拳を振り上げる。

「あ……あ……」

エミナはゴーレムインファクトに恐怖し、その場へたりこんでしまい、動けなくなってしまった。

「エミナー!!」

ゴーレムインファクトのパンチがエミナに振り下ろされる直前、相馬は鋼鉄製の右腕の義手で、ゴーレムインファクトのパンチを受け止める。

「くっ!!」

「そ、相馬……」

「エミナ……早く逃げて!!」

「で、でも……相馬が……」

「僕なら平気です!ベルトも持ってきてますから……だから早く!!」

「わ、分かった!」

エミナは震える足取りで立ち上がり、路地裏から脱出しようとするが、

「ウガアアアア!!」

「っ?!」

もう二体のゴーレムインファクトに、退路を封じられた。

「そ、そんな……」

「エミナ!!!……くそっ!!!」

相馬は目の前のゴーレムインファクトの相手に手一杯であり、エミナの元に駆けつけられるだけの余裕がない。

二体のゴーレムインファクトは、エミナにダブルパンチを放つ。

エミナは目を思いつきり瞑り、身構える。

「エミナアアアアア!!!」

相馬の悲鳴に近い叫び声が路地裏に木霊する。

「……………?」

身構えていたエミナであったが、来るであろう衝撃が一向に来ない。

「「グアッ?!」」

《ダメージポイント・34》

《ダメージポイント・26》

そう思った次の瞬間、ゴーレムインファクト達の苦悶に満ちた声と電子音が聞こえてきた。

エミナは恐る恐る目を開けてみる。

すると、

「こいつらが例の化け物か？」

倒れたゴーレムインファクトの前に、一人の戦士が立っていた。

その全身は銀色に彩られ、注射器型のアイテム『セラピチューナー』をバツクルに縦にセットしており、右手の甲には『セラピナツクル』が装着されている。

「貴方は……」

エミナは目を見開き、謎の戦士に語りかける。

エミナに語りかけられた戦士は、エミナに自身の名を言う。

「俺は……たしか……“セラピス”だな」

「セラ……ピス」

「ああ。……つと、なんつったかな？人類救済システム第二号……だっけか？……うん、そんな感じ」

セラピスは手首を軽く振ると、ゴーレムインファクトの一撃を受け止めている相馬に言葉に投げ掛ける。

「そっちの方も手伝おうか？」

「いえ……大丈夫……です……よ!!」

相馬はゴーレムインファクトをなんとか吹っ飛ばし、アロマドライバーを腹部に装着する。

そして、リーフェナジーポットをアロマチューナーに装填し、アロマドライバーに横にセットする。

「変身!!」

バツクルのサイドレバーを押し込む。

《リーフェナジー》

《チューニング・レボリューション!!》

相馬はアロマに変身し、ゴーレムインファクトを蹴り飛ばす。

《ダメージポイント・27》

「おっ。あんたも変身すんのか」

セラピスはアロマの姿を見ながら、起き上がるうとしていた二体のゴーレムインファクトをセラピナツクルで殴り飛ばす。

《ダメージポイント・35》

《ダメージポイント・37》

「そう言う貴方は、どこでその力を？」

アロマに蹴り飛ばされたゴーレムインファクトが、アロマにパンチを放つが、アロマは軽く避けてゴーレムインファクトの腹部に蹴りをお見舞いする。

《ダメージポイント・38》

「んーとだな。まあ、成り行きてやっかな」

アロマとセラピスは互いに背中を合わせる。

「ところでアンタ…名前は？」

「霧崎相馬……アロマです」

「っ?!……霧崎…相馬」

「?…僕の事を知っているんですか？」

「……いや、なんでもない」

セラピスは倒れている二体のゴーレムインファクトを見つめる。

「こっちは二体とも、残り40だ。決めさせてもらっぜ」

セラピスはバツクルからセラピチューナーを取り外し、セラピナツクルにセットする。

その後、セラピナツクルを上方にスライドさせる。

《ファースト・チャージ》

「奇遇ですね。僕もですよ」

アロマはアロマチューナーのトリガーを押し込む。

《ファースト・チャージ》

セラピナツクルにエネルギーが溜まる。

セラピスはセラピチューナーのトリガーを押し込む。

《ファイナリング・チャージ！！》

一方のアロマの方も、右足にエネルギーが溜まり、アロマはバックルのサイドレバーを押し込む。

《ファイナリング・チャージ！！》

「はあああああ！！！」

アロマとセラピスは同時に飛び上がり、三体のゴーレムインファクトにそれぞれの必殺技『リーフエナジーキック』と『メタルエナジーパンチ』をお見舞いする。

「ゴゴゴアアアアア！！！」

二つの必殺技を喰らった三体のゴーレムインファクトの身体に稲妻が走り、三体とも爆発四散した。

三体のゴーレムインファクトは人間の姿に戻り、その場に倒れていた。

アロマは彼らに駆け寄り、脈を確認する。

「……………くっ」

アロマは小さく首を横に振り、そのまま立ち上がる。

「またか……………」

拳をギュッと握り締めた。

「おい、霧崎相馬」

セラピスがアロマに話しかける。

アロマはセラピスの方に顔を向けると、

「ふんっ!」

いきなり、セラピスがアロマを殴り飛ばした。

「うぐっ?!」

突然の不意打ちに、アロマは為す術なく吹っ飛ばされ、壁に激突する。

「い、いきなり何を……?」

「霧崎相馬……。俺は、お前を許さない!!」

セラピスはアロマの胸ぐらを掴み、振り上げた拳を一気に振り下ろした。

CHART:04【鋼鉄の闘士】(後書き)

次回、

CHART:05【水の迷い子】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4820w/>

仮面ライダーアロマ

2012年1月5日23時51分発行